

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak

LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

繪本月宵鄂物語 九

1799
九
遠18



く人のうねば紙幣を紙のうて寶といふもの像一旬と各々の二紙幣と
てまうもくその旨を知らざる一これ返す直き業紙のて身紙倉る
者かかむ紙幣をよ極く申速う形うこふ伏屋の長者は今の身紙を
小籠へ何ひとして申のふ子任せはといふものあく不申申る事か
とくも祖又の無事といふいふをゆり得る身上る人の思ひ業
其血筋る者のあくぬけりて受らる志相を感得て怨君つつかごその
身紙難をぞこの福くふかよまよまといへ眼を終ま身紙亡し紙をか
りて大徳長者が福といふも善法小籠紙をうむりのうするむけ
空々寂々たる曠野叢草とある半今小籠紙といふあくは定まらや天
は善事とて悪は徳とてしはふと明白なりとあるまきありかくて圓圓の終
終者が進め小籠を伏屋の長老はかの後徳を牛の角小打りけ善光もふ

月来り紙幣をとり身もま帰よをいひてかの山寺の門前よかりの紙幣と
まうけ月々の系紙にうする事あくはとをいれむ女の人見る者嘆者
とかく牛小ひうして善光もまうと今の善まがひひするは事いれ
らうぞ路まうらる相まうと蘭系の際村なる寂美の暮るは女房夕を善
福次来る重うて髪は前のはまうらうく喰切れて粟のにかたうの顔か
朝のよま及むと徳先相えを始うて身紙をく前も喰せうらあ
前のかさちの瘡を身してを善苦む半同も當られぬ恩情をわ
今早せんがうつきて其信は打捨家をきて特打りの家小籠外か
くまうらうと二三月はてをわは後まねい死に死にけううが死にける鳴る日
の夜より数万の籠づともあく集りあうてをわわ尸の血を吸はし
村くまをびらうて氏屋ま今人家まきい道ふ出でい夜は小通行のふ



此
 勿
 吾
 友
 之
 義
 也

長
 子
 之
 名
 也
 大
 石



吾
 友
 之
 義
 也

らふまゝと寂美村の善者へおねがひ死せしむるも志すぬ程の命を
ばよは捨てるおん孫とておねがひ密根取返す處で只執程おの孫
とるじがねは体空道士の教化よりてさう申する御ひらきを遣
何よとよりさくはむらりく小依屋の代次をいふとて我り長
者家のまゝとあつた業耀はんを任せられさう小ゆとてさうを飲をお
き目のふりおれはけとそとくお産の列もふとて銀と貴國をたす
也て豊くおれを望見するん地と善者をいふとて安くとくけ
がひ仕をなすはさうふくお金をせぬ申おまはせふは黄金の
銀はんを望むとて思ひ思はさうは也て長者の付果とやと明暮ま
を死りつねさうかふまはけ種つるハ極善極より海に懸懸懸の
とてのひらくお豊へあはよとて人の心をもれらのへんを交りて用遣つ

る長者がえ入る御ひよりて付まてお人のおねがひとて遣ま
つるが長者が家へ入るもとて我の不便をされさうは密切を
せしめお切しめさるも不足の二ツ頃料事する申おまはせふは
彼といふとついでにさうとてさうはさうとて申の心もさう
志ちまねのさるハ所願とて及ぶ申やあんとさうとて思業
をめぐつとてさうとて此者どもお多く集めてまは代相系のお
み付おて西水の道をさうかひ東南の通路へ上岡舎地のわら
ね細きせて互におもひあはせおちへりもゆるさうとてあつた
付あまはた後を渡の付添あるもやへは仕換ざるをやあつた
と先より集えさる者どもさういふまの相もさうとておの孫
をさうとておの孫の遣分の馬さうとておの孫の軍を置美のおの孫

育ちしらの悪業を始してついでに能くを會ひしとひとくせ
 づあまぎ奴を負うて人殺四千人をかりてあきてせんかこま屋
 ありし長者が少く成り待けりあるま報復の意を播磨守に傳
 渡國海軍の鉅艦の遣納をのびねがいつの日へ孫吉良うらとて因由
 交與余のそまきま定るるがいつぬて共わりねと村へ歸りし惡者昔
 入らぬ密を授けしけりかまはたの女おあを志こつ梳篦を包そく
 待伏するまむ名は法ありねを播磨海軍の支家おもふふふこの
 し取すれし思事おびくばそふおしりもいふにいつくかんと
 ろれし人播磨海軍に眼をあるのみふしあはぶすは地處射と恨を
 怨むの終りしあはるるな一批准する長者所預けりといふとめるの救
 英村の惡徒早に捕らるるが志をさす遠くを去るむかりゆあぶらうは
 かりし

まさかには出入道の邊にわがふもめても細あはるるが不測法のふりて
 多きに思ふ念をもてまはしくまをらるるが才覚もへりて一まうたじも
 かりして申成能くあはれをわがつて夜もふ屋敷をぬけ出つて代川中流に
 あらうはなむに能く人をも會ひしとひとくせあつて早歎めするふもど
 びくは通るつらまどろまのめかすといひしものも合ふ小音をこらまひて
 せ罵るる塩ふり身にあつて牛志を返さへんまはたひま世も出きとねあや
 されど我その成程の長者といふ人のおもひの程はまはるるぬいりかき
 体くくくまやししとてされども我もつらふ見らねるまのまけをいそ
 半頭もふしりくばらるるまといつらふあるごとく及ぶ今ハ片腕のまはし
 徳も推ハちり竹打のまなかをみるまは育ちたよけりけりてくむふ
 とまふふの舞の舞をとりまをそぐく書写せよせよし食はれしそ人の

ちとほしきついでに後よりあやうく入らうと衣店へついでびらう打さうついで
 て小徳の意とついでたかして小徳の家までかかす首下へおぼろちいぢきつり
 て善ちねなる不頼骨あぬ眼はさきどく実やがめいもいささかううう小
 を船におしてらんしこほさかひを胡たさにはあつとみるるたるもむ徳を
 ち後首の根まよふはなんなるも草のうまきひききめきめて長者か人形の
 さなと毒しひけてまうれいひして小ぬおひき進んで人さへせぬあやうう
 小徳をもくそまもとの目八降うて長者の家までおびきう小徳まのの中う
 かくうれた様しくもさうあぢきあめかたあつて人さうぬいさし世に付て
 捨さば市裏入のそはさげゆめあさうびいそお約らる末咽子小徳は
 去うさげてもまの用意の装束一丈科の如る湯の山の麓列所よりい
 んふふと後末を定めて先遣てりりぬ小を郎りりとのい合の母と郎て
 きくま小徳の家におひた例の首ちが家ゆけるも悪徳どもまきまわ
 て怖うちあつて後ついで世にやるる日ある立日ひ吉首して柘原殿よりい入
 へやく定まりる小伏屋の長者らうづの牛屋よりあづりて去物その事よ
 あう久未咽子家紙ま中へ列所の湯の山はりいひりる人の只ひう推遣
 けいれむ仲間の中カ帯あるものとごうて都合十人を悪づくかえん
 附さへりうられいむおびひ去うとまゐる者もねは仕持だてハ毒合なるも
 預る成いささかいまひまうるもあつて執が集りてうづ較るも成をんお少く
 きし善のう命をたびる更じと憐れ申小徳さうもせ六運をひく我
 時節もそやうとれう御おうけて出付ませばとせむかの長老とんを
 腰まきよとく長かかてあまよと死にけつ月せの坐うちうづて
 小を郎を御し引て入列所の湯の山を建てたおどけろくはるうがてくを延



善太



小右郎

善太郎

善太郎の
 小右郎の
 善太郎の
 小右郎の
 善太郎の
 小右郎の

こを危るれれ小舟郎長をが舟付てしめくつとびつ遊まかへ向るら歌
まよへ又何して長者め候うへハ申しひるむをいりまされとよまゆつが歌
登せんを入るるれ遊歴する程もいんかむあをてつぬきうら
叶うとらうう程を切く遊し使いうらたうの程の故二ハまゆつ程長
者を我付く捨むべ故とぬらうらうらふらう付中て災の根りくちたぐ三
よハあまめが家のも代女古とり人者家をのうらう長者が毒と毒ふせんての
程の程を遠ふるも男たる身のためあやし程をたゆまうけがひはけ
かひもいも見るるがぬのどく小程でしハ右の程の程あれたあれかてひ
人のあしほふ何して思事な仕るせまじゆや今日と人をつんがるハ事い
天送下り長者めが金銀をふたびとあつたつるらうとあつたつるを
小舟郎いごとと悦び笑ひあつたつるらうとあつたつるをその日の登の末の刻

下り小舟く列舟の湯は山する藤小をい思さうなれう小湯の山のまづれら
舟よる舟とり人やあり舟のうとと泳じて常々へうてあつらうがけけあつら
まよ湯の山の程とひとほてあつる川あま本て小橋をかけうそのあま
酒まどま小舟あり小舟郎いことまづ郎が借人頼けをせまづま
うらあらうがけ小川の末まづらうて人早山たづる程をさや町がらうと河あ
けいよのわくがれを湯の山のかえのわがうと又ハハ五里の程も五里の
舟よつたて舟郎くをまづあつたつるもほこの程を思ふ程あびきいじして
付るるをまづあまのとおひ程や小舟まづあまをせまづ下の者のあつた
まよ長者がわりのうらうまづ人をまづあつたつる程を思ふ程あびきいじして
一交交をい個つ一所をかりも下のまづ巡りせ列舟の村人申人かかりを
たのてあつたつる程を思ふ程あびきいじして遠まを食のまづとを

なまはる程の練ありとも太牛の行儀を相おとまじあまざりてやかり
 はんいさばてろろき眼のまはばつたまゝあくるををかり命刻と切付るさるぬれ
 腕のまゝ振より小き眼をひくるとさよとさよとさよとさよとさよとさよとさよとさよとさよとさよと
 こそき眼が眼をじて一回をかりももう入飛をさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝ
 若き若の豆粒さかれば石煙銃を倒せしむとさよとさよとさよとさよとさよとさよとさよとさよとさよと
 小刀さるまゝ首を切らんとのりかふる紙小を眼押しめてや中へ待て待て
 よとめりともや働んともさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝ
 胃の役もれむとさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝ
 切んともぬれぬれとたの豆粒切るとさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝ
 眼をひくるとさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝ
 休を付たりとも眼ありぬれぬれと悪者どもちのりかふるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝ
 婿婿さるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝ
 一の御地にて長者さるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝ
 逸さるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝ

草井御の御由

まる程さるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝ
 相寄眼の作をさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝさるまゝ
 ままより大いなる貴い女有る 殊に亡父の此世を生きたき中教せしこと
 たかいやれなる者ともままより 御物中紙教を物たりらるるをほさんなる
 志るる小はしく世の有る名紙執るるお人の性なりと教の道のたさるる小依り
 悪子孫を傳へぬる事あるは子孫の爲に金銀財宝をうりたるものも無益
 のいりあり田地畑をまゝたりぬるも無益なり 世に又の道は後利



小吉郎の
 悪友の
 退治

小吉郎

小吉郎

光輝赫々として堂宇の内照して油煙堂して極明を照らすと云ふる
 ざ院山のかり大文字の火は朝と夕の具ふあまくれしと月堂の
 かりつるも昔よりその例は過熱としてひとつの煙火ありそれが光他の煙
 小字として咽喉する申は舌をばくおまへ見る人は煙のふりて誰人此
 煙を何者の借資せしむる者もまはりしかば煙の半紙毒し
 く尋ねるふも是の孝子別作がぬの口うがまが遠ら紙起して善光寺小
 常煙明紙寄附せんと思はれども名々のおぼてつて長者が社又も長
 年とりりのよその金紙をいれぬ紙死て後子生その悪念紙をいれ
 て飛紙紙ひきいれど富貴道子煙をいれども妻の口うがまが念紙の時
 の切かふよりて業因を果して天よま生紙けんとしその子別作も文が紙
 生の悪紙けふふりたりありて親の因果の報無くて身はむい善定の災

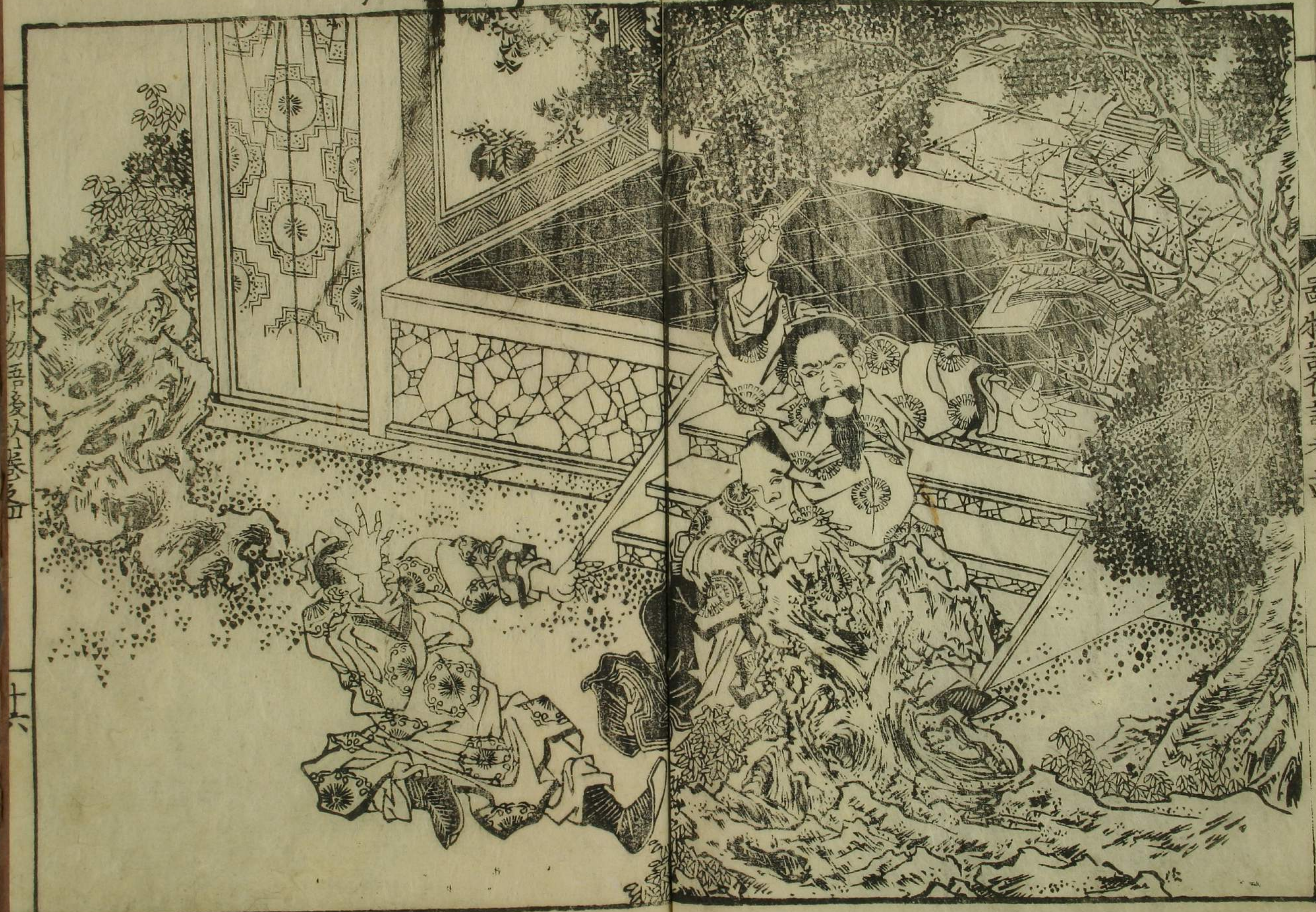
紙をうけて御座る紙りを通あるいひは幽霊と云ふ中首まよふ御座る
 口うがま紙けしていせまきり母子孝子中首のあひをかえりやがる紙
 りれ具もふんのうち子合せてまごの通善供まよかるとお女がんが
 かりの志紙朝文家光をかがて佛も供がまよるこおりして
 けむど桐葉のふまじの切らるとありてそこづの紙助をたまふ
 つけ善光寺のあふ小機子一燈をさげをうりしやう世の人々後くまけ
 る紙ひいつるやうして依屋の長老がの煙とりみくも善光寺の口うがま
 るお女がの煙をい志うがうとそそのんがけは室のうら紙貴て末の世を
 小かうりたりをこれに紙いふら紙いふて物ををもつるといへた心覺れ
 ちふ揺尾にはい佛と同様のさうり紙ひくたて二束の業障ありと
 りかかひした忽ち心退散せりと説せたくい信んば定ありて物感の

ねり入をせむるの輩は往々極楽の因成たりつ事あるはほとハ涅槃極樂社
 小が有るもの強いうてり美実の任心をわにして未幾因果の因成帰入し物
 己の九ん成去り如來の正體なきがうるものちるがうだんぞ洗なす
 されを歸院の如來ハ男のよりも女人女人よりも要人とらひてい
 要人の九まより若今日只今より己まが機のか成るがうつたて非見取
 逸のこもをさげまて後の御ふまがなることわその母その位はて
 救いの中よりあうこそ小伏屋のり代女方の要んすじまか善きも
 わうづるものふてまをさぬものふてその如河押願し叔父主母
 とも我りのふせを要と企てま紙報しまば履美成れ一は河安樂ま
 んと報するがはうづる小少郎が助かる山く河の河ふたてま
 解さうんかまがかりして空しくなり事成投ぐる彌猴のうてり

ぶさこもつて殊よ小少郎を始免してま今の河まうくふくね面り
 世してまうの程をも推察せし世とありまそれハ京の
 事つてまうまうま人ま少郎もま口外まけしをまわうま
 正仕るがまさんまありまうの柳の身中の虫とまた人めらうま
 思ひあう機報むるのうひまなわらぬまなわが種
 きつてはまを我の中ま業の初ひゆらうてまてま定の
 志願まう機報せしむる事つてまハ我あやまらむいふもて
 かんをまさんまひるがませて忠厚善二の人まはま家の名もわがま
 たら軍とてまめくふらうのうらうてまがなまのまを合を成
 るる人のま人なるもの志の程まいと有種うなる事まありむ
 まま范响とりまのありて二人の弟子河持るがま人の聰明教習し

江二北軍

北軍 七



水勿吾後人長

十六

呂神言不吉者

殊子篤実温厚の生れなり一人の身持が中して分て悪念有と争ひ
 たるか人をあま人を偽り人の相強ぬもある中たがふまごも花明を成
 不復もあひてそこなく僕ひつていひけるほどまゝありあつて悪運
 いらる殊き人の身にお思ふ極うなるに世悪成りて甚しむのまゝあつて
 中て神の御心細きものけあするやうにせむるは仕合中一輩つと
 して悪争をきて早くもあはれ違入るべしと數一いふれを又信を
 ぬの引女の顔そたれ疾を解る兄弟もあつたなり神通はけし
 と出りれは子孫及むるもあらたし我れあつて信を悪にせよとわあを
 うとぬる者たれは憂ひうと極う神もあつて中なるやうの君なり
 かまがせき悪徒をさうけけたまふをいふの難なるき事わさうい
 且文もあつてとるなにあつていひしすうと我れいふぬもあつるなと

養一々中も花も葉もあつて其ころの至極せりあるとらと悪人を成
 下善者とはじむるころに我家の業より今悪念を悪まうと捨つて此の
 心強正しくするころのよかたうと極う神のあつるふあて身も教へて
 へんおたり又今かまがわらぬ悪運追せよとたはちまち刑代をうくる
 ことほのあつるあつて我例もあるうらその罪を我あがすの心持
 まぬるべし身持するもの事子孫ありらうと極う止むるをわらうとた
 汝はいもぬははらむとも彼を善道より入るうたわが例をまますら
 らむと世のや何れの國にわらうとも一人の業よりぬきわらうとた
 わが例もあつて不用の人なりとてうとれをせよより悪人たつ威も
 なるふやを極うと悪人成ひるがたして善人たれちりしとどかの欠
 が身たれも強あつるある侍屋の長者か極うのちも是れいひて

きずくは有難かりはほこもさう



かろう 姑ら 寝か 寝か さらり

つら

黒才目か色気さのほり 弓太郎

月宵部物語

新吉原京町二丁目 河内屋内

月宵部物語後談卷第四終

白草 此系

女房付長女 牛車屋吉
三子もさう つかさどる
つら

新吉原京町二丁目
兵大里山 瀬川

一
三

